

令和6年度 健康福祉学科

自己点検・評価報告書

令和7年3月

富山短期大学 健康福祉学科

令和6年度 健康福祉学科 自己点検報告書

1 建学の精神（他部局で記載のため省略）

2 地域・社会貢献

（1）現状

①「地域からの介護人材参入促進事業」（富山県委託）

- ・令和3年度からの3年間、呉羽地域6地区を対象に実施した「地域での介護の仕事魅力アップ推進研究モデル事業」をもとに、対象エリアを富山市北と西保健福祉センターエリアの20地区に拡大して、「地域での出前講座（勉強会）」と「ウェルビーイング介護サポーター養成研修」を実施した。
- ・「地域での出前講座（勉強会）」は地域住民を対象としたものは「貢献寿命」と「Well-being」、小学生を対象としたものは「介護ロボット」をテーマに46会場で開催し1008人の参加があった。
- ・「ウェルビーイング介護サポーター養成研修」は「基礎講座」「業務体験」「入門講座」のステップアップ型とし94人が受講し、令和6年12月末現在7人が介護助手として活躍している。
- ・3月には「いつまでも元気に社会貢献」をテーマに県、市、地域住民、事業所、社会福祉協議会、学生らが参加し「介護助手交流会」を開催した。

②シルバー人材センターセミナー

富山県シルバー人材センター連合会の依頼を受け、「シルバー派遣キャリアアップ教育訓練」の講師を務め、学科教員1名が計3会場を担当した。

③「中学・高校生介護人材発掘事業」（富山県社会福祉協議会から受託）

中学校や高校への出前講座を、中学校5校に計6回、高校8校に計8回実施。

④リカレント教育（県補助事業）

「富山県高等教育機関リカレント教育推進事業」を活用し、「実践的外国人介護人材の受入れ講座ーサポート制度・インターンシップ生受入れ・現状と今後ー」をテーマに、3回シリーズでオンラインにて実施した。

⑤「高校生のための健康と福祉のオンライン・ワンポイントセミナー」

健康と福祉の入門講座をオンラインで5講座を実施した。

⑥富山県介護福祉士養成校協会の会長校および事務局校

県委託事業「高校生のための福祉のガイド本」（第9版）を本学が中心となり作成し、県内の高校1年生を対象に配布した。

⑦「介護の日」イベントへの参加

- ・ボランティアグループ「Tomitan スマイル 8+」が考案したリズム体操を披露。
- ・1年生有志でブース運営とチラシを配布し、認知症や要介護状態の方々に対する理解を深める啓発活動を行った。
- ・イベントのサブタイトルが2年生の応募作品に決まり、表彰を授与した。

⑧ゼミ活動を通じた地域貢献

- ・ゼミ活動を通し、タクティールケアや高齢者のスマートフォン教室、e スポーツ、小学校への介護の授業などを開催した。

⑨富山県「認知症にやさしい地域づくり推進キャンペーン 2024」に参加し、県内 3 か所での街頭キャラバンやショッピングセンターでのハンドケアのブース開設等を通し、啓発に努めた。

⑩その他

個々の教員の専門性を活かし、多様な依頼を公務に支障がない範囲で引き受けている。

- ・富山県社会福祉審議会委員をはじめとした審議会や各種会議委員
- ・介護支援専門員や介護福祉士実習指導者、民生委員・児童委員、社会福祉協議会等の研修講師
- ・富山県看護協会や富山県介護支援専門員協会、富山市保護司会の役員としての活動

(2) 課題

- ①外部からの依頼に応じていくため、効率的な学科運営に向けた改善が必要である。
- ②小学生、中学生、高校生、そして地域住民への出前講座に参加した人は介護の仕事のイメージが良くなるが、介護人材を確保するまでの子どもの成長に時間がかかる。

(3) 特記事項

- ①富山県介護福祉士養成校協会の平成 15 年度の創立以来、会長校ならびに事務局校を担っている。
- ②富山県障害者スポーツ大会（陸上競技会）の補助スタッフとして、学科開設以来、学生が毎年参加している。
- ③日本介護福祉士養成施設協会の総務・政策委員及び東海北陸ブロック協議会副会長を学科長が担った。
- ④日本介護福祉教育学会の実行委員を副学科長と教員 1 人が担った。
- ⑤富山県福祉人材確保対策・介護現場革新会議人材確保対策ワーキング及び外国人材マッチング等支援ワーキンググループ座長を学科長が担った。
- ⑥富山県福祉カレッジ運営委員会研修カリキュラム検討分科会座長を学科長が担った。
- ⑦富山県社会福祉協議会 富山県ボランティアセンター運営委員長を教授 1 人が担った。
- ⑧富山市社会福祉協議会 地域福祉活動計画策定委員会委員長を教授 1 人が担った。

(4) 改善計画

- ①講師や委員等の依頼は、公務を調整しながら積極的に受けていく。
- ②中学生・高校生を対象とした講座を積極的に実施していく。

3 教育目標

(1) 現状

- ①学生及び教員に配布する『学生のしおり』に明記するとともに、本学 Web ページの「学校概要～教育研究活動の概要」でも学内外に表明している。自己点検・評価委員

会、総合学務センター委員会、学科会議での検討に加え、卒業前の2年生との教育課程懇談会、兼任教員や非常勤講師との教育課程懇談会を実施し、点検・見直しを図っている。

- ②富山県社会福祉審議会をはじめ富山県福祉人材確保対策・介護現場革新会議や富山県介護福祉士養成校協会等での討議結果などを参考に、社会が求める介護・福祉人材像を学科の教育活動に反映できるよう取り組んでいる。
- ③福祉・介護職場のニーズに対応するため、情報化・デジタル化、介護ロボット・ICT、多職種連携など介護現場との整合性を図るとともに、健康と幸せ・well-beingを支える人材の育成に向けて検討を行った。

(2) 課題

- ①健康と幸せ・well-beingを支える人材の育成に向けた教育を行うことを、高校生にもわかりやすい文言で表現する。
- ②社会課題の解決に向けた教育目標や教育内容になるよう、毎年見直しを行っていく。

(3) 特記事項

- ①介護実習では、多様な学生が各実習の目的・目標を達成できるよう、実習施設と話し合いながら進めた。また、学生、実習指導者、教員が同じ視点で実習できるよう「実習指導者会議」や「介護実習の評価に関する検討会」などでの意見を踏まえ、実習目標や実習指導、評価の見直しを行った。
- ②教育目標との整合性をとるため、「生活支援技術」の内容を見直した。「生活支援技術Ⅰ・Ⅱ(基礎)」、「生活支援技術Ⅲ(応用)」として教育を行った

(4) 改善計画

- ①健康と幸せ・well-beingを支える人材の育成に向けた教育とはどのようなものか、具体的な表現で表す。
- ②毎年の年度末に定期的に、教育課程懇談会や学修行動基本調査など、その年の教育成果を探るいろいろなものを参考にして、教育目的・目標のふり返しを行う。

4 学習成果

(1) 現状

- ①建学の精神に基づき、健康福祉学科の学修成果を定めている。学修成果を「学生のしおり」やWebシラバスに「学修成果別判断基準(ルーブリック)」として記載し、学内外に表明している。
- ②Webシラバスを利用して学生は毎回の授業をふりかえるほか、期末の授業アンケートでの学修成果をレーダーチャートで可視化し、点検するとともに、各教員が学期ごとに「授業改善レポート」を作成している。
- ③生活支援技術については生活支援技術到達評価表を作成し、2年次の2月に到達度を評価している。また、医療的ケアについては学生がチェックリストに基づき5回以上授業時間で行うとともに、実技試験でミスがない状態を成果としている。

- ④学習成果としての資格取得は、国家資格である介護福祉士、医療的ケア基本研修修了、普通救命Ⅱ講習修了、介護職員初任者研修修了、社会福祉主事任用資格、メディカルクラーク、ケアクラーク、福祉住環境コーディネーター、日商 PC 検定、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会認定「介護サービス担当者のためのストーマケア講習会」修了、アクティビティ・ワーカー資格受験、ウォーキングトレーナー、公認初級パラスポーツ指導員、介護予防運動トレーナー資格を取得可能としている。

(2) 課題

- ①学生が自然災害(大雪、地震、台風等)で登校できない場合に、学習成果をあげる創意と工夫が必要である。
- ②科目ごとのルーブリックが学生に十分伝わっているかの確認が必要である。

(3) 特記事項

- ①実習指導者会議や実習事前訪問をオンラインで行い、実習指導者と効率的な実習目的・目標の共有が行えた。
- ②実習の学修成果を高めるため、「介護実習の評価に関する検討会」を3回にわたり開催。

(4) 改善計画

- ①自然災害など危機管理時は、本学の危機管理対策本部の指示に従うとともに、オンライン授業の対応を迅速に判断する。
- ②科目と科目のつながりや、ルーブリックについての理解を深めるオリエンテーションを学生に行う。

5 三つの方針

(1) 現状

- ①本学が定めた三つの方針及び、学則第2条の2(4)に定めた学科の教育研究上の目的に基づいてディプロマ・ポリシーを、教育課程編成方針とともにカリキュラム・ポリシーを「学生生活のしおり」に記載している。また、アドミッション・ポリシーを学科の教育課程と一体的に策定している。いずれも本学の Web サイトで公開している。
- ②前期末及び後期末の「授業評価アンケート」の結果や卒業前の学修行動基本調査の結果を学科で検討するほか、卒業直前の学生との「教育課程懇談会」、兼担教員や非常勤講師との「教育課程懇談会」を開催し、教育全般に関わる意見を参考に三つの方針を定めている。

(2) 課題

- ①三つの方針の見直しの材料となる授業評価アンケートや学修行動基本調査の回答率を高めること。
- ②ディプロマ・ポリシーの「育成する人材」について学生に理解してもらうこと。

(3) 特記事項

類似の資格取得が可能な科目および内容が重複している科目を整理検討し、学則及び介護福祉士養成課程履修細則の見直しを行った。

(4) 改善計画

- ①学生の率直な意見を知る機会となるため、アンケートの回答率を可能な限り 100%に近づける働きかけを行っていく。
- ②入学時のオリエンテーションはもとより、オープンキャンパスなど多様な機会をとらえて、育成する人材に必要な力についての理解と関心を高めていく。

6 内部質保証

(1) 現状

- ①定められた時期に毎年、学科内で教員全員が分担しながら自己点検に取り組んでいる。評価項目は短大基準協会の第三者評価の基準をもとに実施し、標準的な自己点検・評価となるよう努めている。
- ②日常的な自己点検・評価活動の一環として、毎週行う学科会議では、日頃の教育活動や学生指導等が出てきた課題や予想される事項についての意見交換、すでに生じた事案への対応などを学科の総意と共通理解で行う体制を整えている。また、支援結果についても学科会議で共有している。
- ③高校訪問で出された意見や富山県介護福祉士養成校協会による「介護福祉士養成教育に関する連絡協議会」で寄せられた意見なども、自己点検や評価活動に反映している。
- ④大学で設置する「外部評価委員会」での指摘事項も自己評価の材料としている。
- ⑤教員との教育課程懇談会ならびに 2 年生との教育課程懇談会で寄せられた意見等も、積極的に反映させている。
- ⑥2 年生による学習行動調査の結果も学科会議で共有し、意思統一のもとで改善に取り組んでいる。

(2) 課題

自己点検が単なる数字や文言の修正程度に終わらないよう、作成後の各自の確認と学科全体での問題点の把握と確認が求められる。

(3) 特記事項

シラバス作成後に学科内での点検作業も導入し、教員相互で改善に取り組む体制と意識化を図っている。

(4) 改善計画

自己点検作業を通じて顕在化した課題を科会で提起し、次年度の改善に反映させるとともに、その年の自己点検でふり返りを行う。

7 教育の質

(1) 現状

①概要

- ・教育向上と充実の PDCA サイクルは、前期・後期の始まりの教務委員によるシラバス点検や学科教員全員が学内の FD 研修会に参加するとともに、毎回の授業、成績の分布や授業アンケートの結果を分析して「授業改善レポート」を作成し、改善につなげている。
- ・個別支援に生かすため、入学時の学力を把握する入学時テストを実施した。
- ・年度末に教育課程懇談会を 2 年生、教職員（非常勤講師を含む）それぞれと実施、改善につなげている。
- ・介護福祉士養成課程の生活支援技術については生活支援技術到達表を作成し、2 年次の 2 月に到達度を学内評価している。医療的ケアについても、喀痰吸引（口腔内・鼻腔内・気管カニューレ内）、経鼻経管栄養、胃ろう・腸ろうの 5 種目について、チェックリストに基づき 5 回以上実施した後、技術試験でミスなく実施できた時に合格としている。
- ・実習では、シャドーイングを取り入れた実習を行い、基礎実習 I - 1 終了後の調べで、介護福祉士資格取得を目指す学生の割合が 100%となった。
- ・情報化・デジタル化、進化・深化する介護に対応するよう、生活支援技術に「介護ロボット・ICT」を 1 単位位置づけ、学内での講義、演習を行うほか、「とやま介護テクノロジー普及・推進センター」や先進施設として内閣総理大臣賞を受賞した「ささづ苑かすが」での学外授業を行った。

②授業アンケート結果

- ・学修成果に対する自己評価の平均値は、昨年度に比べて 1 年生、2 年生ともに前期、後期ともに LO1 から LO5 全ての項目で増加した。
- ・総合評価での授業満足度は、前期は 1 年生 3.5 から 3.7 に 0.2 ポイント増加、2 年生 3.2 から 3.5 に 0.3 ポイント増加した。後期は 1 年生 3.6 から 3.7 に 0.1 ポイント増加、2 年生前年同様 3.4 であった。

③シラバスのルーブリックからみた学修成果の評価

- ・シラバスのルーブリックからみた学修成果では、自己評価や満足度において評価が高く、学修成果も高い科目もあればそうでない科目もあった。

④学修行動・生活調査

- ・回答率 73.9%で、在学して満足している（「とても満足」＋「満足」）と答えた人が 8 割、学科教員からの学習支援に満足している（「とても満足」＋「満足」）と答えた人が 9 割を超えていた。

(2) 課題

- ①学生個々の特性や抱える課題に対応した授業展開と個別指導
- ②学生の体調に伴う、授業のハイブリッド対応など合理的配慮の提供

(3) 特記事項

疾病等で登校できない学生には、必要に応じ補講やオンライン授業で学びを保証した。

(4) 改善計画

- ①日常の場面で気づいたことは情報共有し、教育の質の向上に努める。
- ②学生の授業満足度や学修成果があがるように、個々の学生の特性に応じたわかりやすい授業や個別指導に取り組む。

8 学位授与方針

(1) 現状

- ①卒業認定ならびに学位授与の方針は、学則第2条の2にある学科の目的達成のために編成した教育課程を履修し、規定の単位を修得することとなっている。
- ②学科の卒業認定・学位授与方針は学科の学修成果に対応しており、卒業の要件、成績評価の基準、資格取得の要件も「学生のしおり」で明確に示している。
- ③学科の卒業認定・学位授与の方針は、短期大学設置基準と照らし合わせて点検しており、社会的・国際的に通用性があると考えられる。
- ④卒業生の単位取得状況や科目の履修状況などを参考にしながら、能力基準別到達目標（学修成果）の点検を年度末に行っている。
- ⑤合理的な配慮が求められる学生に対しては、卒業まで到達できるよう、適切な支援に努めている。

(2) 課題

- ①体調や精神面でさまざまな課題を抱えながら学ぶ学生が毎年数名いるため、積極的な学習支援が求められる。
- ②ChatGPT（OpenAI）の利用が簡単にできる時代となり、期末レポートの課題がどのようになされたかの確認が取りにくくなってきている。

(3) 特記事項

学生の疾病や障害の状況によって、合理的配慮が必要な場合は、医師等の意見を踏まえ対応した。

(4) 改善計画

- ①担任やゼミ担当が当該学生の取得単位や GPA を期末ごとに確認しながら指導するとともに、学科で状況を共有しながら必要な支援について意思統一を図っていく。
- ②レポート作成での安易なインターネット利用への注意を促しながら、レポートの採点基準を教員間で平準化するための検討を進める。

9 教育課程編成・実施の方針

(1) 現状

- ①教育課程編成・実施の方針は、卒業認定・学位授与の方針に対応させ、同時に見直しを行っている。
- ②短期大学設置基準に則り、学修成果に対応した授業科目の配置となるよう毎年点検を

行っている。

- ③学科の教育課程は「学生のしおり」に記載し、資格取得との関連も含めて学生にわかりやすく明示している。
- ④教育課程編成方針、教育課程実施方針（教育内容・方法）と学修成果の評価方法、学修成果の評価は年度末に見直しを行っている。
- ⑤介護福祉士養成課程においては必修科目に含めるべき教育内容が国により定められており、該当科目はシラバスでその点が確認できるようにしてある。
- ⑥介護職員初任者研修においても、定められた教育内容を漏らさず実施できるよう取り組んでいる。

（2）課題

「データ・AI・情報リテラシー」に代表される全学的な AI 教育プログラムの学習を進めて、デジタル化に対応した学生を育てていく。

（3）特記事項

特になし

（4）改善計画

データ活用とそれによる課題解決能力の向上につながるよう、教育課程の見直しを行っていく。

10 幅広く深い教養

（1）現状

①教育課程体系図

- ・ Web シラバスにおいて教育課程体系図（カリキュラムツリー）を示している。
- ・ 学科の教養科目には区分「健康」「人間と社会」「外国語」を設けている。

②区分「健康」では、ウォーキングトレーナー、アクティビティワーカーと公認初級パラスポーツ指導員の資格取得に対応した。

③区分「人間と社会」では、本学科の特徴として「ボランティア演習」、社会生活でも活用される「コミュニケーション論」はじめ、福祉の基盤でもある「人間の尊厳と自立」など、幅広く深い教養と豊かな人間性を修得できるよう科目を配置している。また、「情報処理演習Ⅰ・Ⅱ」「人間と情報」により、数理・データサイエンス・AI 教育プログラムへの対応を行っている。

⑤「教養演習」では、自発的・主体的に学習し、「読む」「読み取る」「考える」「書く」「意見を出す」「調べる」という能力を高めることを目的としている。ゼミクラス方式による少人数の参加型学習で進め、各グループには学科の専任教員 1 名がつく。前半は新聞記事を題材にまとめる力や発表力を高め、後半は本学がある呉羽地域でのフィールドワークを行い、調査した内容をグループごとに発表した。

⑥区分「外国語」では、異文化及び言語に触れ、国際交流に役立つコミュニケーション能力を養うため、「英語」と全学共通の短期留学プログラムを設けている。学生の幅

広いレベルに応じた授業展開となっている。

(2) 課題

教養演習では、本学がある呉羽地域でのフィールドワークを行っている。教養演習の成果を、専門科目である総合的研究(卒業研究)を経て、地域への貢献につなげる経路・手法の開発が必要とされている。

(3) 特記事項

健康福祉を学ぶ学科としての特性を明確に伝え、科目編成に取り組んでいる。とくに教養演習や総合的研究では、本学がある呉羽地域でのフィールドワークを行い、地域への貢献につなげることを試みている。

(4) 改善計画

教養演習の成果を地域への貢献につなげる経路・手法の開発を進める。

11 職業教育

(1) 現状

- ①キャリア教育として「キャリアデザイン演習」を1年前期に必修で開講している。特別講座や実践講座を組み入れながら実施した。
- ②キャリア支援センターによる進路ガイダンスを、2年次4月のオリエンテーション時に開催している。併せて、「キャリアガイド(就職活動の手引き)」を配布している。
- ③2年前期にハローワークから講師を迎え、面接指導とマナー講座を実施し、全員が受講している。
- ④介護実習では、実習を通じて介護観を構築できるよう働きかけている。基礎実習からシャドーイングを取り入れた実習を実施し、学生は「説明・見学」「模倣」「実施」のプロセスを通して介護の仕事の魅力に触れ、職業選択に役立てている。
- ⑤1年後期にインターンシップを選択科目として設けている。
- ⑥後期のオリエンテーションで「先輩と語る会」を開催し、高齢者施設、障害者施設、福祉ビジネスなどへ進んだ卒業生を講師に、仕事の内容、やりがいなどを1・2年生に話してもらっている。
- ⑦就職特講では、福祉・介護系、福祉ビジネス系の職業人より講演いただいた。
- ⑧全員が介護職員初任者研修を修了できるカリキュラムとしている。

(2) 課題

- ①主体的に就職活動を行えるよう、学生の意識を高める働きかけが求められる。
- ②学生は実習先から就職先を選択する傾向があるため、さまざまな事業所へ視野を広げた就職活動を促す。

(3) 特記事項

- ①科会で2年生の就職活動状況を情報共有し、就職支援担当者とゼミ担任の連携で適切

な支援につなげた。

- ②近年の動向として、進路を問わず介護福祉士資格の取得を希望する学生が増加しており、介護福祉士資格の重要性、優位性の理解が深まっていると推察する。

(4) 改善計画

- ①計画的に就活に取り組むようゼミ担当が積極的に指導に関わり、科会でそれぞれの状況を報告するようにする。
- ②キャリア支援の担当教員と2年生の担任が中心となって、学科へ寄せられる求人状況を把握しながら、学生へ適宜案内していく。

12 入学者受け入れ方針

(1) 現状

学科の教育目標・教育方針に基づき、入学者受け入れ方針を定めている。

- ①【求める人物像】では、3つの人物像を明示することで、学科の学びの特性と求める人物像が、高校や高校生に伝わるようにしている。
- ②【高等学校で習得しておいてほしい内容】では、習得してきてもらいたい内容を3点にわたって提示している。
- ③【求める資質・能力】では、全学的な方針に準拠したものにしている。
- ④【入学者選抜における評価方法】では、「富山短期大学入学者選抜実施要項」に基づき、4学科共通の内容で明らかにしている。
- ⑤毎年度末には学科内で見直しの検討も行っている。

(2) 課題

学科の教育課程との整合性や学科の特徴がわかりやすく表現されているかを確認しながら、高校側にわかりやすいよう、柔軟かい表現に見直していく。

(3) 特記事項

- ①2月に学科で見直しを行い、【高等学校で習得しておいてほしい内容】を高校生にわかりやすいよう、高校の教育課程を基に具体的な表現へ変更した。
- ②アドミッションポリシーは短大の改編とその方針に合わせて見直すことを確認した。

(4) 改善計画

- ①特記事項のとおり、【高等学校で習得しておいてほしい内容】3項目のうち2項目を変更する。
- ②新しい学科として示されるアドミッションポリシーに合わせて、現在のものを見直していく。

13 明確な学習成果

(1) 現状

- ① Web シラバスの各科目の学修成果別評価基準（ルーブリック）との照合や、履修学生による授業評価アンケート等の結果をもとに、学習成果の明確化に努めている。
- ② 卒業認定に合わせ各資格・検定等の取得人数（修了者数）の集計を出し、その学年における学習成果として活用している。

(2) 課題

Web シラバスの各科目の学修成果別評価基準（ルーブリック）の妥当性の検証

(3) 特記事項

基礎実習にシャドーイングを導入して以来、介護福祉士の資格取得を目指す学生における取得率 100%を維持している。

(4) 改善計画

学生の授業評価アンケートの結果や教員の授業改善レポートをもとに学習成果をより妥当なものへ、点検と見直しをしていく。

14 学習成果を測定する仕組み

(1) 現状

- ① 介護実習は各自で「経験録」を実習ごとに記入し、何を見学したか、説明を受けたか、体験したかの区分で実習内容を残せるようにしてある。
- ② 卒業前の学修行動調査をはじめ、毎回の授業アンケート、科目ごとの期末試験や実習評価、各期末の授業評価アンケート等で測定している。
- ③ 介護福祉士資格を目指す学生は全員、生活支援技術の到達度の判定を卒業前に受けている。
- ④ 2 年生は日本介護福祉士養成施設協会による全国統一での学力評価テストを受けている。また、外部模試も受けている。
- ⑤ 免許や資格などの取得状況も用いている。

(2) 課題

学習成果を確認するツールである授業評価アンケートの回答率 100%を目指す。

(3) 特記事項

実習指導者と共に「介護実習の評価に関する検討会」をオンラインで 3 回開催し、今年度の介護実習評価についてデータを基に振り返り、施設実習の評価方法について意見交換を行った。

(4) 改善計画

授業評価アンケートの実施時期やタイミング、回答率を高める工夫など、学科内で

十分に検討して学生に働きかける。

15 学習成果を可視化する指標

(1) 現状

学習成果は、Web シラバスの各科目の学修成果別評価基準（ルーブリック）との照合や、履修学生による授業評価アンケート等の結果、日本介護福祉士養成施設協会による全国統一での学力評価テスト踏まえ対応し、可視化する指標の一つとして、免許・資格等取得状況を利用している。取得状況は次のとおりである。

- ①介護福祉士国家試験 受験資格 22人
- ②医療的ケア基本研修修了 22人
- ③普通救命Ⅱ講習修了 22人
- ④社会福祉主事任用資格修了 23人
- ⑤介護職員初任者研修修了 21人
- ⑥メディカルクラーク（医科）技能審査試験 5人（合格率 71.4%）
- ⑦ケアクラーク（介護）技能認定試験 8人（合格率 61.5%）
- ⑧アクティビティ・ワーカー 1人（合格率 100%）
- ⑨介護予防運動トレーナー 1人（合格率 100%）
- ⑩介護サービス担当者のためのストーリーマケア講習会修了 23人
- ⑪四年制大学の3年次編入学合格 2人

(2) 課題

資格・免許によっては費用の関係で取得手続きに至らない学生がいる。

(3) 特記事項

特になし

(4) 改善計画

入学時点で、資格取得に要する費用や手続き時期を示し、計画的に取得しやすいようにする。

16 卒業後評価への取組み

(1) 現状

- ①5月下旬から7月中旬にかけて、前年度卒業生の県内の就職先を訪問し、本人や上司との面談結果を学科で共有するとともに、学生指導に反映させている。
- ②上記訪問時の採用先へのアンケートでは、4項目のうち「礼儀・基本的マナー」と「チームワーク」への評価が高い（いずれも最上位のAが46%）ことがわかった。
- ③前年度の卒業生を対象にオンライン同窓会を平日の19時から20時にかけて毎月1回開催し、就職先訪問のあとも定着支援と状況把握に努めた。

(2) 課題

調査項目が「礼儀・基本的マナー」「チームワーク」「前に踏み出す力」「考え抜く力」の4つあるが、入職後2か月程度での評価であり、職場や仕事へ十分馴染んでいない時点で聞き取るため、卒業生によっては様子を正確に伝えているかどうかわからない。

(3) 特記事項

前年度の卒業生に対し、「礼儀・基本的マナー」「チームワーク」「前に踏み出す力」「考え抜く力」の調査項目すべてにわたり、A（良い）とB（やや良い）合わせて70%を超える評価をいただくことができた。

(4) 改善計画

半年後ぐらいでの状況把握の手立てを講じ、必要があれば相談に応じるなどフォローアップにも配慮していく。

17 教育資源の有効活用

(1) 現状

福祉棟D館3階ラウンジに3台のデスクトップPCとプリンターを設置し、学生向けの教育資源として提供している。D館1～3階およびC館2～3階まで1GbpsのイーサネットLANを設置し、Wi-Fi環境も整備されている。タブレット10台とインカム10台を整備し、情報システムが整備された福祉施設の環境に準じた実習を展開できるようになった。

令和5年度入学生からノートPCを必携としたが、福祉ビジネス・情報系の科目だけではなく、その他の科目においてもノートPCを活用している。

(2) 課題

大教室(D206)のプロジェクターや、学生向けのプリンターなどの老朽化が進んでおり、これらの教育資源について、コストパフォーマンスを考慮した更新が課題となっている。

(3) 特記事項

昨年度に引き続き、「数理・データサイエンス・AI教育プログラム」の導向かって、デジタル化へ対応する教育課程の編成に取り組んだ。

(4) 改善計画

老朽化した教育資源について、コストパフォーマンスを考慮しつつ更新を進めていく。昨年度に引き続き、学生の学習用PCの利用を促進する。日常の学習や遠隔授業のみならず、実習やインターンシップの記録にも活用し、進化・深化していく介護に対応する人材育成に取り組んでいく。

18 学習支援

(1) 現状

①入学前セミナー

12月までの入試における合格者を対象に実施し、事前課題を設けて提出してもらった。当日は、課題の振り返りとレポートの書き方についてのミニ講義、学生による学生生活の準備に関する懇談も行った。

②ゼミ担任制度

1年前期は教養演習ゼミ、1年後期から総合的研究のゼミによる担任制度で支援した。

③プレースメントテストの実施

入学時点での学生の基礎学力を把握する手立てとして、1年生全員に基礎的な国語力を見る問題でのプレースメントテストを実施し、その後の学習支援に役立てた。

④資格取得対策

介護福祉士国家試験の受験対策として、科目ごとに担当教員が補習授業をするほか、特別授業も実施して取り組んだ。外部模試も実施した。

⑤父母等懇談会

家庭との連携を取るために、大学祭に合わせて開催した。

⑥個別支援

学習上の課題を持つ学生には、クラス担任、ゼミ担任、分野別教員により多面的な支援を行うほか、学科の会議で情報共有するなどの体制をとっている。また、必要に応じて家族とも連携しながら進めている。

⑦経済的な支援

経済的な課題を抱える学生には、富山県社会福祉協議会による介護福祉士等修学資金（介護福祉士国家試験受験資格取得希望者が対象）をはじめとする奨学金等を紹介している。受験生にも入学前セミナーでも案内している。父母等へもオープンキャンパスでの父母等説明会や入学後のオリエンテーションで案内し、利用を促している。

⑧国家試験対策

2年後期の1月を国試対策期間として、介護福祉士国家試験受験に備えた授業及び補習・自習時間を設定している。短期集中かつ感染症対策に配慮しオンラインで実施している

(3) 課題

父母等懇談会への参加者が極めて少ない。連携を持ちたい学生の家族への働きかけがうまくいかない。

(4) 特記事項

介護福祉士国家試験の受験対策として、過去の問題を用いた模擬試験、学力評価試験および外部模試を実施した。試験の結果を直ちに採点して返却することにより、効果的な受験対策に取り組んでいる。

(5) 改善計画

参加につながるよう内容の見直しを図る。

19 生活支援

(1) 現状

- ①担任とゼミ担当教員が連携できるよう、日頃から学科会議等で情報共有を行っている。
- ②実習期間は「健康チェックシート」を活用した健康管理を指導している。
- ③メンタルヘルスにおいては学生個々に合った対応を心がけ、学生の同意があれば学科教員間で情報を共有しながら支援をしている。
- ④学生生活に関し学生から意見や要望があった際は、その都度、学科会議で検討し、対応した。

(2) 課題

新型コロナウイルス感染症が5類になったものの、未だ終息に至らない状況である。通常の対面形式の授業を実施しているが、登校時には学生の心身の変化を見逃さないことが必要である。

(3) 特記事項

合理的配慮が必要な学生に対しては家庭訪問等、個別対応を実施した。気になる学生に対しては、その都度、家庭への連絡を行って情報共有を図り、今後の対応について話し合った。

(4) 改善計画

特別な配慮を要する学生には日頃から気にかけて、いつでも相談ができる環境を学科全体で整える。

20 進路支援

(1) 現状

- ①1年前期に「キャリアデザイン演習」を開講することで、福祉関連企業を志望する学生の早期就活に対応させている。
- ②福祉職場説明会（「福祉のお仕事フェア」）には学科教員が引率し、事業所との橋渡し等を行った。一人最低3か所を目途にブースを回り、比較検討しながら志望先を選ぶよう指導している。事前指導では、求人票の見方や説明会の活用の仕方を説明した。
- ③2年生の進路動向を学科全体で情報共有に努めるとともに、キャリア支援センターとの連携を毎週行っている。
- ④学生の特性に応じて学科長あるいはゼミ担、就職支援委員等で面接練習を行い、落ち着いて採用試験に臨めるよう支援した。
- ⑤履歴書添削は、本人の主体性を引き出しながら、ゼミ担もしくは就職支援の担当教員で個別指導を行った。
- ⑥一般就職においては、学生の性格や能力を踏まえたうえで、主体的な取組みを促した。
- ⑦就職筆記試験対策講座の意義について1年生に説明し、受験対策としての利用を促した。
- ⑧求人の依頼を約250の事業所にキャリア支援センターを通じて発送した。届いた求人

票はすべて福祉棟の掲示板に貼りだし、就職への意識化と情報提供に努めている。

- ⑨四年制大学への編入学支援では、編入学後に履修する科目の一部を短大在学中に履修できる「科目等履修生」を申請するよう指導している。
- ⑩委託訓練生にはキャリアコンサルタントによる個別面談を取入れ、採用内定まで学生の不安を軽減させながら主体的に取り組めるよう支援をしている。
- ⑪進路指導特別講座「先輩と語る会」を後期のガイダンスに合わせて開催し、1・2年生全員が昨年度の卒業生らから、進路別の取組と就職後の様子をうかがう機会としている。
- ⑫進路指導特別講座「2年生から1年生へ」を、おおむね2年生全員の進路が決まった2月に開催し、2年生から就活の実際を直接聴ける機会にしている。
- ⑬複数の学生が同じ事業所での就職を希望する場合、同一教員が指導を行う体制をとっている。

(2) 課題

- ①進路がなかなか確定しない学生の主体性の引き出し方
- ②発達障害その他の課題を抱える学生への進路指導

(3) 特記事項

通学課程ではなく働きながら学ぶ通信教育での編入学を選ぶ学生が、今年は2人出ている。

(4) 改善計画

- ①就職の受験先を決めきれない学生には、提出書類の準備を先行させながら就職への意欲喚起を図るとともに、面談を通じて就職先へのニーズを把握し指導を行う。
- ②家庭とも連携しながら、拙速な進路決定に走ることなく、本人にとって最善の方策を検討していく。

21 健康支援

(1) 現状

- ①健康課題を抱える学生に対し、運営管理部（健康支援センター）や教育研究部（総合学務センター、キャリア支援センター）とも連携して、組織的な支援を行っている。
- ②相談内容によっては一律的にクラス担任が相談窓口となるのではなく、より適切な教員が対応するよう配慮している。
- ③気になる学生については、必要に応じて家庭と個別対応のための情報共有を図った。
- ④状況によっては主治医とも面談をし、情報の共有や訴えの確認、ならびに本人への継続的な支援などを行っている。
- ⑤配慮を要する学生に対し、可能な限り卒業に向けての単位取得ができるよう、授業及び実習の調整を図った。
- ⑥介護実習では、学修面に課題を抱える学生や精神的に不安定になる学生に、担任や科目担当教員がコミュニケーションを取りながら取り組めるよう支援を行った。

(2) 課題

- ①毎年入学してくる課題を抱えた学生への支援体制の構築
- ②プライバシー保護に配慮した学内の関係部署との情報共有と、対応における共通理解。

(3) 特記事項

配慮が必要な学生については、それぞれに応じて、オンラインでの受講の許可や実習での巡回回数を増やすなど、多方面での配慮により卒業につないだ。

(4) 改善計画

- ①課題を抱える学生に関し、健康支援センターとの連携を深める。
- ②学生からの相談は学生の同意を得たうえで、学科内で支障のない範囲で共有し、人によってぶれない支援を行っていく。

※22～25 は他部局で記載

26 教育研究活動

(1) 現状

- ①専任教員は、各規程を遵守しながら、教育課程編成・実施の方針に基づき、教育活動をおこなうとともに、関連する諸学会に所属して研究活動を実施している。
- ②学内紀要への投稿や学会発表などに努めた。
 - ・「富山短期大学紀要」に研究ノート1編が掲載された。
 - ・科研費基盤研究(C)(一般)「ポスト・コロナ社会に向けた超学域的eツーリズム研究の構築」共同研究(北海道大学、慶応義塾大学、富山大学、南山大学、富山短期大学)を行った。
 - ・公益社団法人富山第一銀行奨学財団「国際労働移動システムから見るメゾ構造より捉える介護技能実習生制度の持続化に向けた研究～3者(技能実習生、受入施設、送り出し国側)からの視点より～」にて研究発表を行った。
 - ・公益社団法人富山第一銀行奨学財団「外国人介護士による日本の介護技術・技能移転の可能性への探究」をテーマに研究を行った。
 - ・Sweden MediCare Institute(スウェーデンの学会)の学会誌へ査読付き論文(1本)が掲載された。
 - ・日本レセプト学会学会誌に査読付き論文(1本)を掲載された。
 - ・日本レセプト学会国際学術大会(ベトナム ハノイ)の大会長を務めた。
 - ・日本レセプト学会国際学術大会(ベトナム ハノイ)にて「A Study of the Distinctive International Labor Mobility System in the Technical Intern System: From the Perspective of Value Co-creation between Vietnam and Japan」をテーマに研究発表を行った。
 - ・日本レセプト学会国際学術大会のシンポジウムで、コーディネーターを務めた。
 - ・日本介護福祉教育学会で「介護福祉士養成校の教育機能を生かした地域からの介護人

材確保の試み—入門的研修からマッチングまでの支援を通して」と「シャドーイングを取り入れた介護実習とその効果」について発表した。

- ・日本介護福祉教育学会で2人の教員が分科会座長を務めた。
- ③富山県からの委託事業「地域からの介護人材参入促進事業」は厚生労働省より様々な会議で紹介されるほか、PwC コンサルティングが取組む厚生労働省補助事業「介護の入門的研修から入職までの一体的支援モデル構築に関する調査研究事業」の自治体情報交換会で発表するとともに、事例集に掲載された。

また、この事業での取組をきっかけに、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)が取組む令和6年度老人保健健康増進等事業「介護福祉士養成施設における国家試験合格に向けた取組に関する調査研究事業」において厚生労働省の本学訪問があり、本学の取組が事例集に掲載された。

- ④1年前期の「教養演習」および1年後期からの「総合的研究」において、今年度もフィールドワークの手法を導入し、調査研究の対象を大学が立地する呉羽地域に設定して取り組んだ。
- ⑤総合的研究の発表会では広く呉羽地域の各種団体や福祉施設等からの参加があり、たくさんの質問や助言をいただくことができた。

(2) 課題

学生確保はじめ学科業務の増加や、多様な学生への対応などにより、研究時間の確保が難しくなっている。

(3) 特記事項

- ①富山県老人福祉施設協議会の研究レポート選考委員
県老協による研究レポートの選考委員会で座長を12年にわたり務めている。
- ②令和6年度日本介護福祉教育学会の実行委員として、教員2名が携わった。

(4) 改善計画

時間割を見直すことで研究活動の時間を確保し、また、専任教員が研究について意見交換する機会を設けるなどして、合同研究にも取り組んでいく。

令和6年度富山短期大学卒業生【令和6年3月卒】の事業所・企業等就職先訪問 報告書

— 集計 —

健康福祉学科					
調査卒業生数 24名					(%)
評価項目	A (良い)	B (やや良い)	C (普通)	D (やや悪い)	E (悪い)
1. 礼儀・基本的マナー	11名(46%)	7名(29%)	5名(21%)	1名(4%)	0名(0%)
2. チームワーク [チームで働く力]	11名(46%)	6名(25%)	6名(25%)	1名(4%)	0名(0%)
3. アクション [前に踏み出す力]	7名(29%)	10名(42%)	6名(25%)	1名(4%)	0名(0%)
4. シンキング [考え抜く力]	5名(21%)	9名(37.5%)	9名(37.5%)	0名(0%)	0名(0%)
5. その他、上司・指導者のコメント					
仕事には主体的に問題意識を持って取り組んでおり、協調性もあり、問題なし。					
非常にしっかりしており、安心している。一人で早番をし、もうすぐ、夜勤も一人立ちの予定。					
素直で一生懸命頑張ってくれています。嫌な事や困っているなどの発言がないので、かえって大丈夫かなと心配している。					
仕事覚えがとても早いです。マニュアルも、だいたい頭にはすぐ入るようで、かといってマニュアル人間ではなく、自分で考え臨機応変に行動できるところは、今時の若者には珍しい強みだと思います。					
自分で問題意識をもってわからないことは質問できる。緊張感をもってよくできている。					
指導したことを素直に聞いて行動している。緊張はあるが、ニコニコ元気にしている。一つひとつ丁寧に利用者へ接している。					
遅刻や欠勤をすることはなく、業務も真面目に取り組んでいます。また利用者に関わる様子にも誠実さが見られ、人柄の良さが感じられます。					
こちらから業務を依頼することもあります。早く引き受けられ、取り組んでいただいています。					
挨拶、気配りができるが、仕事での積極性を求める。どんどん質問をしてほしい。いい意味で甘えてほしい。自ら周囲に積極的に話すことがないので、周囲とのコミュニケーションを積極的に図ってほしい。					
まじめに仕事に取り組んでいる。新人研修もポイントを捉え、わからないことは聞きにきていた。					
柔らかい雰囲気、窓口対応もよい。自分の持ち味を大切にしてほしい。周囲からの評価も高く、今後の成長に期待している。					
朗らかで明るく、積極的に質問をし、業務に取組んでおられます。利用者の話を聴き、丁寧に受け応えされています。介護の基本・コミュニケーション技術など、学ばれたことを支援に活かされています。					
職員との調和もとれている。挨拶やお礼などしっかりと言葉に出して言っている。					
不明な点は質問するなど、コミュニケーションに優れている。					
業務を覚えようと自分なりに努力しているのは感じられる。					
覚えるのがゆっくりマイペースである。ユニットリーダーやベテランの方がついて指導を受けている。					
6. 大学に要望すること(大学で指導してほしいこと、学生に身に付けてほしいこと 等)					
ユマニチュードについて指導してほしい。					
指示待ちではなく、自ら考え行動できる人材					
ストレスに対応できる能力をつけてほしい。					
医療事務現場としては、男性の医療事務職員もありがたいと考えている。					
明るい返事と明るい挨拶					
時間を守ること、連絡をすることなど、マナー教育					
施設実習までに、実習日誌や介護計画などの基本的な書き方を学んでいただきたい。					
教育指導がしやすい人の育成もお願いしたい。					
7. 来年の求人について					
例年、よい人材を送り出してもらっているので期待したいです。					
現在、人員が十分におり、次年度は採用予定はないが、計画的に採用していきたい。					
ぜひ自閉症を多くの学生に知ってもらえればと思います。					

8. 卒業生からの声 ※あるいは該当年度以前の卒業生からのコメント

わからないことはその都度、確認をしている。研修計画がわからず不安である。

非常に楽しく充実している。一日があっという間に過ぎる。自分の思いを表現できない人にもしっかり対応できるようになりたい。

職場の人はみな優しい。仕事は楽しく、充実している。

仕事は楽しくできている。わからないことは教えてもらえる。

就職前のイメージと違っていたが、頑張っています。楽しく働いています。

職場の人間関係は普通。親切に教えてもらっている。仕事が辛いとかはない

人間関係がよくて、職場には満足している。覚えることが多くて、今はたいへんである。

電話対応が難しいが、頑張っている。

利用者さんから話しかけられるようになってきて、仕事も楽しい。

学科の先輩が二人おられるので安心している。研修も充実しており、たいへんだが満足している。

まだわからないことがたくさんありますが、毎日楽しく働いています。

楽しく仕事をしている。目標とする先輩もいる。

企業への就職サポートも充実させてほしい。